

## 第八十六回 文学界新人賞最終選考通過

### 『ペランダ』

原稿用紙換算83枚

山城真道 著

退屈は十月の第三土曜日を境に妙な角度から崩れていった。

その日僕は寝坊した。時計を見て逆算すると、どう急いでも一時間目に二十分は遅れることが分かった。どうせ遅れるのならとのんびりしていると四十分近く遅れて学校の教室に着いた。一時間目は体育なので教室には誰もいなかった。

僕は一人ボーッと教室の窓際に立って外の景色を見ていた。白々しい程に爽やかな光景だ。青い空、白い雲、遠くにそびえる山々、グラウンドを駆け回る生徒達……そんな景色は僕を白けさせた。まるでリアリティーがない。と、いつか臨場感がないんだ。この平和な世界に僕が含まれているように思えない。

何となく窓ガラスに右手をぺたっと当ててみた。僕はその瞬間に何かを諦めていた。だが、諦めた後では何を諦めたのか判別しかねる。しかも殆ど無意識の諦めだったので、その像はまるで波風を立てずに消えてしまった。

憂鬱にすらなれないまま僕はぼんやりと他の生徒達が教室に戻るのを待った。そこに最初にやって来たのは米倉だった。彼は教科書とノートを鞆から出した。その姿は妙に優雅だった。無駄な動きが無く、米倉独特の仕草を交えながら、それでいてとても自然だった。

米倉と言うのはそんなやつだった。彼は一つの芸術作品のような匂いを漂わせている。そして彼という人間は何者かに丁寧な演出されているようにも見える。恐らく何者かとは彼自身なのだろう。彼はそんな頭の良さを持つている。僕はあまり彼とは親しくもないのだが、遠めに見てもその「頭の良さ」は感じられた。或いはそれも彼の演出によるものかもしれないが、まあ何にしても僕よりは利口な人間なのだろう。

彼はふと僕の方を見た。そしておもむろに僕の方へ歩いて来た。その端正な顔立ちは僕を緊張させた。

「君もサボったの？」

米倉は完成度の高い声でそう言った。

「うん」

と、僕が少し間の抜けた声で言うと、へえーと言って彼は僕に並んで窓の外に目をやった。僕はなんとなく何か話さないといけない気がして彼に尋ねた。

「君、進路どうするの？」

「シンロ？」

「あの…進学か就職か…」

米倉は小さく笑ってから言った。

「随分ありふれた質問だな。最近は皆にそれを訊かれるよ」僕もだ。

「人に進路を訊くのが義務にでもなってるのかな？」

米倉はうんざりしたようにそう言った。

「そうかもしれないな」

「もつと気の利いた質問ってないのかな？」

「例えば？」

「それは自分で考えてくれよ」

気の利いた質問……、僕はしばらくそれを考えたが碌なものも思い付けなかった。そして沈黙が続いた。

米倉は僕には何の興味も無いようで、じつと遠くを見ていた。僕なんかと話すことはないのだろう、と思ったが突然彼は口を開いた。

「あのさ、君の家にベランダってあるだろ？」

「ああ。あるけど？」

「あれさ……俺にくないか？」

「僕の家はベランダを君に？」

米倉はしつかりと肯いた。

「ああ、いいよ。やるよ」

僕は冗談だと思ってそう言った。「冗談でなかったら一体何だというのだ？」

「本当か？本当にくれるのか？」

僕は躊躇いながらも小さく肯いた。米倉は嬉しそうに言った。

「じゃあ、ちょうど明日、日曜だから見に行くよ。ちゃんと家族にも言っとけよ。ベランダを人に譲ったって」

「解ったよ」

米倉の目が真剣なので少し恐くなってきたが、頭のいいやつのは冗談と言つのはこういうものなのだろう、と思ひ直した。

やがて他の生徒達が帰つて来た。そして僕は友人の長谷川に呼ばれて米倉から離れた。

それから学校が終わるまで米倉と話すことはなかった。ベランダのこともすっかりと忘れて僕は家に帰った。

夜になって、母と晩御飯を食べているときにふとベランダのことを思い出して、そのことを言おうかとも考えたが、それも馬鹿げてるので止めた。母は母でテレビに夢中になつている。黙っておけばいいだろう。

食べ終わつてから僕はなんとなくベランダに出た。少し寒い。僕の家は五階建ての団地の二階なので景色はあまり良いとは言えない。正面には隣の棟が大きく構えているし、右を見ても左を見ても駐車場と道路しか見えない。他には駐車場の周りに取つて付けたような木々が並んでるぐらいだ(それは文字どおりどこかから取つてきて植え付けたものだ)。夏には僕は風呂上がりでここでアイスクリームをよく食べていた。それなりにだが、ここにはいい風が入ってくる。いつも静かで空気がゆつたりとしている。ここに居ると気が休まるし、頭が冴える気がする。ただこれは全て夏の夜のベランダの印象だ。その時期以外にベランダでくつろぐことはない。

日曜日、僕は正午過ぎに母の声に起こされた。

「ユウイチ、電話よ」

僕は十分に眠つたのですっきりと目覚めた。

「誰から?」

声はちよつとフニヤフニヤしている。

「ヨネクラって子から」

「ヨネクラ?」

米倉? 米倉が何の用だろうか? と当然の疑問を抱えたまま、僕は電話に出た。電話の向こうで米倉が言つ。

「今から行っていいか?」

「どこへ?」

「『どこへ?』って君の家じゃないか」

「来てどうするんだよ?」

「何だ? 寝てたのか?」

「今、この電話で起きたんだよ」

「それは、悪かったな」

「いや、それはいいけど。で、来てどうするんだよ？」

「昨日、言ってたじゃないか。ベランダ見に行くって」

「ベランダなんか見てどうするんだよ？」

「やっぱり気になるじゃないか。どんな感じか？」

「何で僕の家をベランダが気になるんだよ？」

「何言ってるんだよ。俺のベランダだろ。しっかりしてくれよ」

「冗談だろ？」

「とにかく、今から行くからな。ちゃんとベランダにある物だけといてくれよ。それじゃ」

米倉は電話を切ってしまった。僕は何がなんだか解らないまま、顔を洗いご飯を食べた。そして腑に落ちないままベランダの物をそこから退ける事を考えた。見るとベランダには洗濯物が干してある。サッカーボールが転がり、折り畳まれたデッキチエアーがある。鳥のいなくなった鳥かごに、一度と履くことのないであろうローラースケート等、結構いろんな物がある。僕は冷静に考えて、とりあえず片付けるのをやめた。米倉が来てからちゃんと話し合おう。或いは来ないかもしれない。それがいわゆる「普通」と言うものだ。

三時前に米倉はやって来た。カジュアルな服装の米倉を見るのは新鮮だ……しかし今はそんなことはどうでもいい。とても淡々と米倉は僕に訊いた。

「なんて呼んでる？」

「何を？」

「決まってるだろ。ベランダのことだよ」

「もう何を言ってるんだか……」

「ベランダはベランダだよ」

「何だ、名前ないのか？まあ俺が考えればいいか」

僕は思い切って尋ねてみることにした。

「君は本当にベランダを貰う気なのか？」

「もちろんだよ」

「ベランダなんか貰ってどうするんだよ？」

「どうするかはまだ解らないよ。でも欲しいんだ。貰えるものは貰つといた方が得だしね」

もつともらしい言い分だが「らしい」だけだ。

「とりあえずベランダに通してくれないか？」

「もしそれを僕が断ったらどうする？」

「一応、梯子を持って来たから裏から直接ベランダに行くよ。下に置いてあるけど、見るかい？」

まさかと思つて階段を降りると、あつた。三メートルぐらゐのアルミ製の梯子だ。

「これ、君が持つて来たのかい？」

米倉は肯いた。そして僕は道路の脇に停めてある見慣れないマウンテンバイクを見つけた。

「もしかしてあれ君の自転車か？」

米倉は肯いた。一体どうやって自転車であの長い、そして恐らく重い梯子を運んできたのだらう？

「大変だつたよ。梯子を担いで自転車漕ぐの」

それは大変だらう。つまり……米倉は真剣なのだ。冗談でそんな大変なことできるものじゃない。

僕は諦めて彼をベランダに通した。部屋は散らかつてたが、彼はそんなもの見ていなかった。ベランダを見るなり彼は言つた。

「何だよ、あれ？全然片付いてないじゃないか？」

「今、片付けてた所なんだ。悪いけどもうちよつと待つてくれないか？」

僕は大人しくベランダの物を家の中へ移して行つた。米倉は黙つてそれを見ていた。どこか腑に落ちない気分ではあつたが、たしかに筋を通して言うなら僕が勝手に冗談と思ひ込んだのが悪いのかもしれない。

「はあ……終わつた」

あらかた片付いてから、どこか虚ろな気持ちで僕はそう言つた。

「まだだろ？竿が在るじゃないか？」

「勘弁してくれよ。あんな物家のどこに置けばいいんだ？」

「それは俺の知つたことじゃない」

やれやれ。とりあえず僕は二本の物干し竿を部屋の中に入れて、斜めに立てた。それは予想以上に不自然な景色で危うく笑いそうになつた。米倉はすつきりとしたベランダを見て不敵な笑みを見せた。

「それじゃあ、俺帰るけど人のベランダ勝手に使うなよ」

そう言つて米倉は歸つてしまつた。

一時間も経たないうちに、買い物に行つていた母が歸つて来た。何と言つて説明すればいいのかまるで解らないが、どう言つても母を納得させることはできないだらう。僕だつていまいち納得してない。

ちようど父は出張で来週の日曜まで帰ってこない。そして幸い僕には兄弟はいない。母一人ぐらいなら何とか上手く誤魔化せるだろう。いっそも言わなければいいのかもしれない。

母はまず玄関に転がってるサッカーボールや鳥かごを見た。そして部屋中に干されている洗濯物を見て、やたらと存在の浮いている物干し竿を見た。そして当然の疑問を僕にぶつけた。

「ちよつと何なのこれ？」

「僕もよく解らない」

「どういうことよ？何で洗濯物取り込んでるの？いい天気なのに、もつたいない」

「さっきまで雨が降ってたんだよ」

「嘘でしょ？それになんだって竿とか鳥かごまで取り込んでるのよ」

「竿や鳥かごもどうせなら濡れないほうがいいじゃないか？」

僕はそんなふうにも誤魔化してもみたが、母は当然納得してない。いたたまれない気持ちで僕は言葉を継いだ。「上手く言えないけど、しばらくベランダにあるもの全部部屋に入れておかないと駄目なんだ」

「何で？」

母はきつと、僕が米倉に対するのと同じような気持ちで自分の息子を見ているのだろう。つまり僕はひどく訳の解らない存在だ。この状況を脱するには、当然のことだが訳の解ることを言うしかない。

「話せば長くなるんだけど……」

「いいから話さない」

「ちよつとベランダを使うんだ」

「何に？」

「宿題なんだ」

「宿題？」

「どんだん訳が解らなくなる。ベランダを使う宿題って一体どんなものだ？」

「理科の宿題で星を観察しないといけないんだ」

「だからって竿とか鳥かごが邪魔にはならないでしょ？」

「もつともだ。どう考えても母の言うことに分がある。」

「とにかく、すぐに全部戻すから、今はこのままにしないで」

母はとりあえずそれ以上は何も言わなかった。もしかすると息子が少し怖くなったのかもしれない。受験ノイローゼ：或いは母には僕はそんな風に見えたかもしれない。でもそのぐらいのことで済むならいいだろう。

と思ったが食事のときなどは異様に気まずい。母は時々心配そうな目で僕を盗み見ている。親にそんな目で見られるのは随分と久しぶりだ。やはりなるべく早くベランダを返してもらおう。

僕は実際に受験ノイローゼになるぐらいのつもりで、夜遅くまで勉強をしていた。碌に勉強もしないで受験ノイローゼと思われる心配させるのも申し訳ないような気がしたからだ。

勉強は予想通り面白くなかった。ただ覚えてばかりだ。ひたすら覚えて覚えて……。エンジンもハンドルもない車のトランクに荷物をひたすら積み込む……。その車はどうやって走るのだろうか？きつと傾きに合わせて転がるように進んでいくしかない。

ただこんな風に思っただけでも、ノッてくると集中して結構必死になってしまう。そして多くのことを覚えると、自分が賢くなったかのような錯覚が起きる。それは厄介なこととに決して悪いものではない。でも間違っちゃいけない。暗記で賢くなれるほど世界は甘くはないはずだ。漠然とした感覚で言つと、本当に賢い人間というのは暗記というのが似合わない。米倉なんかがそうだ。彼に暗記は似合わない。そして恐らく必要としないだろう。

それにしても何故そんな米倉が人の家のベランダを必要とするのだろうか。この家のベランダを手に入れるということに何か重大な意味があるのだろうか？僕のような凡人には解らないような……

僕は勉強を中断し窓を開けてベランダを見てみた。何もないベランダは以前より広く見えた。そして不思議な感じがした。ベランダにあるものを見ることはあってもベランダそのものを見ることはない。ベランダという名の空間はどこことなく寂しげだった。だが、米倉という明確な所有者を得て安心しているようにも見える。僕は淡い罪悪感を感じながらベランダに出た。そうすると僕が安心できた。当たり前だが別に何も変わっていない。僕はすぐに部屋に戻った。

月曜日の朝、不自然に部屋に存在している物干し竿を見て僕はベランダを取り戻す意志をはっきりと確かめた。そう、取り戻すんだ。あの契約をやはり無かったことにするのではなく、米倉のベランダを僕が貰うんだ。それが筋というものだ。筋なんか気にしなければ楽に片がつきそうだけど……どうせなら筋を通してすっきりしよう。

学校で、僕はずっと米倉にベランダのことを言い出す機会を探っていた。米倉は殆ど一人でいるのでその機会は幾らでもあったのだが、どうも切り出しにくかった。でも言わなければという義務感はあるばかりだ。その義務感に押され、僕は自分が米倉に話し掛ける場面を想像した。その想像の中で僕のありきたりな言葉に米倉はうんざりしていた。ありきたりじゃない言葉を探したが、碌なものか思いつかない。ありきたりじゃないものを探すとどうしても常軌を逸した所に行ってしまう。

息苦しい想像から逃げるように、僕は教室の隅の席に座る米倉に近づき話し掛けた。

「どこか、痒い所ないか？」

これも常軌を逸した科白だが、米倉にはこれくらいで丁度いい気がした。米倉は満足そうな微笑みを見せてから言った。

「職員室の左の方が痒くてたまらない」

こうなるともう他の人には聞かせられない会話だ。でもそんな時に他人がやって来ることもある。長谷川が何気なくやって来た。

「ここで君が『職員室の左の方』を搔きに行ってくれたら面白んだけどな」

米倉がそう言つと、長谷川は不思議そうな顔で言った。

「何の話だよ？」

「別に何でもないよ」

僕はそう言つたが長谷川は自分が相手にされてないようなのが気に入らないようだった。

長谷川の印象は米倉とは正反対だった。常に何も考えてないような奴で、また自分に自信を持ってないのかいつも人の弱い部分を探して、それを見つけると喜んだ。親友ではあったが長谷川は僕にとってどうでもいい奴だった。教室でもよく話すし、よく一緒に遊びにも行く。この間は一緒にバンジージャンプをしに行った。お互いに好きな女の子の名前も知ってるし、ちょっとした人生論のようなものを語り合うこともあった。なかなか楽しめる奴であり、その



存在を有り難く思ふこともある。が、にもかかわらず、最終的な所で彼は僕にとつてどうでもいい奴だった。哀しいようだけどそういう関係はある。どうでもいい悪いの違いは上手く言えないけど、つまり彼と僕の間には何かが足りない。友人として共通すべき何かが…。

何はどうあれ今の僕がすべきことはベランダを取り戻すことだ。だが長谷川がいる所でベランダのことを言いだすのも何だし、だからと言って長谷川を引き離すいい考えも浮かばない。今日のところは諦めるといふ手もあるけど、このままじゃ洗濯物が満足に乾かない。

「そうそう名前が決まったんだ」

米倉はそう言った。僕は尋ねた。

「何の名前だよ？」

「ベランダだよ」

長谷川は不思議そうな顔をしている。僕は意表を突かれて戸惑った。ベランダのことは僕と米倉の秘密のような気がしていたので、長谷川のいる所でベランダのことを言い出すとは思えなかった。僕は習性的に長谷川に対して照れ笑いを見せた。その後で米倉を見ると自分が恥ずかしく、情けなく思えた。米倉は自信に満ちて素の表情でいたからだ。

「聞きたいか？名前」

「別に聞きたくないよ。それより話があるんだ」

「何だい？」

僕も負けじと表情を変えずに言った。

「ベランダを返してくれないか？」

長谷川は訳の解らなさそうな顔をしている。たぶん冗談だとも思えないのだろう。米倉は相変わらず表情を変えずにいる。そして感情を見せない響きで言った。

「何を言い出すんだよ？」

「洗濯物が乾かないんだよ」

「だからって人のベランダを欲しがるってのもおかしい話だな」

僕はほんの少しだが腹を立てた。いまさら「おかしい話」が何だと言っただけ？

「とにかくベランダが要るんだ。何だったら何らかの代償を払う」

「解った。ベランダは返すよ」

「本当に？」

「もちろん条件があるけどね」

「何だよ？」

「職員室の左の方を掻いて来てくれ。そうしたらベランダを返すよ。」

僕の中の米倉という人間像は少しずつ浮かび上がって来て、そして少しずつその奇妙な形を見せる。奇妙に感じるのは僕が最初に思い描いていた米倉の像と大きく異なるからなのだろう。或いは僕も奇妙な存在なのかもしれない。結局の所、違いというものは確かにあるが何を奇妙と思いつても正常と思ふべきか解らないし、それを考えることに大した意味はない。

米倉の言葉に少し戸惑ったが、僕はその米倉の話に乗ることにした。そうしないと恐らく米倉はベランダを返してはくれないだろう。それで済むんならそれで済ませよう。

僕と米倉は職員室へ向かった。それに長谷川も付いて来た。僕の右を米倉が歩き、左に長谷川がいた。何となく米倉と長谷川が隣り合って歩くことは無いように思えた。実際僕はその状況を一度たりとも見ることはなかった（だからどうだと言つこともないが、つまり二人はそんな関係だった）。

長谷川は何度もベランダに関する状況の説明を求めた。が、僕も米倉もまともに答えなかった。まともじゃない状況をまともに説明するのはひどく馬鹿げてるし、どうせ長谷川を納得させることは出来ないだろう。結局、長谷川は不思議そうな顔をしたままで職員室の前までついて来た。さて。

「ここの左の方を掻くんだったね？」

米倉は自信ありげに肯いた。恐らく米倉は僕にはそんなこと出来ないと思つているのだろう。戸を開けて覗いて見ると、当然だが先生がたくさんいた。僕が授業を受けたことのある先生と全く知らない先生と。

僕はあまり深く先生と関わることはなく、会話をする時もあるべく当たり障りの無いことを儀礼的に言っていた。そして僕は先生たちに真面目な大人しい人間だと思われていた。

そんな僕だがこれからこの職員室の左の方を掻かなければならない。ちらつと左の方を見る。幸い知らない先生ばかりだ。しかしやりづらいことに変わりはない。

僕は自分の行動を想像した。戸を開けて職員室に入る。そして左の方へ行きしゃがみこんで床を掻く。壁を掻くという手もあるが、それだと多くの人の視界に触れる可能性

がある。床を掻くにしても位置的に確実に僕を見るであろう中年の男の先生が一人いる。僕が床を掻きはじめるとその先生が不審げに言う。

「何だ？君、どうかしたのか？」

「痒くて堪らないそうなので、掻いてやってるんです」

僕の言葉を先生は不思議がる。或いは怯える。「冗談には取ってくれないだろう。特にこの先生は眼鏡がよく顔に馴染んでいて、見る人に『経済』という印象を与えていて（背広とネクタイと眼鏡とその勤勉そうな表情が、僕の中でぱっと見た感じの印象を『経済』にしている）冗談に縁がなさそうだ。

そして『経済』はあいかわらず不審そうに僕を見つめる。僕は居た堪れない視線を感じながら立ち去る……

僕はそんな想像をしてみても、その状況への嫌悪を強く感じた。そんなことしたくはない。しかし、しなければペラペラは返ってこないし、米倉はやっぱり出来ないじゃないかと嘲笑うだろう。その状況への嫌悪の方が強い。

僕は米倉に不敵な笑みを見せて（僕としては不敵な笑みのつもりだが、米倉には怯えて引きつった笑いに見えたかもしれない）職員室に入った。僕は『経済』の側でしゃがみこんだ。『経済』は自分の前の机の書類をじっと見ている。まだこつちを見ていない。僕はさりげなさを装って（もちろんそれは全くさりげなくはなかったが）床を少しの間、掻いた。『経済』がふとこつちを見た。怪訝な顔で僕の様子を見ている。

「おい、何をしてるんだ？」

その言葉に対して僕は緊張のせい何か何も言い返せなかった。そして黙ったままつい照れ笑いをしてしまった。『経済』は予想通りそれを冗談と感じなかったようだが怪訝な表情のまま僕を見ている。黙って薄笑いを浮かべながら職員室の床を掻く生徒……恐らく彼の目には酷く不気味に映っただろう。僕は結局、居た堪れない視線を感じながら立ち去ることになった。でも達成感があった。僕はやるべきことをやり遂げたんだ。

職員室を出ると長谷川は首をひねりながら僕の様子を窺っている。米倉はどこか満足そうに僕を見ている。僕は少し無理して誇らしげに言った。

「見たか？」

「正直、驚いたよ。君は度胸に似たものを持ってるね」

「度胸に似たもの？」

「今君が見せたのは度胸ではないってことだ。ただ周りが見えなくなっただけだ」そう言われればそれも解る気がする。米倉が続けた。「それにしても照れ笑いが失敗だったな」

「失敗？」

「高度な冗談というのは真剣な顔でするものだよ」

それもまた解る気もするが、僕にはもうそんなことどうでもよかった。ペランダを取り返すことが目的であり、その目的は達したのだから。

教室に向かいながら、僕は喜びを顕わに言った。

「何にしてもペランダを取り戻せてよかったよ。僕はともかく親が大変だからね」

米倉は不思議そうに僕の顔を見た。そして小さく笑って言った。

「何を言ってるんだ？」

今度は僕が不思議そうに米倉の顔を見た。

「だからペランダを取り戻せて良かったって……」

「もしかしたら君、勘違いしてないか？」

「勘違いって？」

「自分が職員室の左の方を掻いたと思ってるんじゃないか？」

僕は黙ってしまった。

「君が掻いたのは職員室の床じゃないか？」

「ちよつと待ってくれよ？」僕は立ち止まって言った。

「じゃあ職員室の左の方って一体何なんだよ？」

「それだよ。俺は何で君がそれを訊かないのか不思議でしようがなかったんだ。『職員室の左の方』なんて曖昧にも程がある。それに君の目線で見ればあれが左なのかもしれないけど、逆に職員室目線で見ればあれは右になる」何だ？職員室目線って？僕は呆気に取られたが必死に言葉を発した。

「つまり…ペランダはまだ君のものなのか？」

「もちろんだ」

「それならもう一回行ってやり直すよ」

「残念だけでもう時間だ」

米倉がそう言うのと授業開始のチャイムが鳴った。

次の休み時間。僕は米倉を職員室に行こうと誘ったが、米倉はまるで乗り気じゃなかった。

「それはもう良いだろ。飽きた」

「飽きたとかそういう問題じゃないだろ」

「そういう問題だよ」

そこに僕のクラスの担任の先生が来た。隣のクラスで授業をしていたらしい。先生は僕に向かって言った。

「どうだ。勉強してるか？」

僕は応対が面倒臭かったので曖昧に肯いた。この担任の先生は小者で僕の受ける印象では明らかに米倉の方が格上だった。

「おまえもな、大学に行くんならふざけた遊びやってる場合じゃないぞ」

僕は先生の前でふざけたことをやった覚えはない。つまり先生はさっきの僕の職員室での行為を『経済』から聞いたのだろう。

「休み時間でも勉強するぐらいじゃないと大学なんか行けないぞ。今は辛いかもしれないけど、その代わり今頑張るとけばこれからの人生で有利になれるからな」

しばらく先生は僕らが「聞き飽きた話」を続けた。言いたいことは解るが、もういい。米倉の顔を盗み見ると明らかにうんざりしていた。うんざりしているのを見せ付けようとしているのかもしれない。

「米倉は出来るやつだからいいんだけど、どうせならもつと上を目指したらどうだ？」

米倉はうんざりした顔のままてんてん。

「何処行っても同じですよ。どんな良い大学行ったって馬鹿は馬鹿だし……先生も結構有名な大学出てるんですよ？」

「まあな」

「何処行っても同じですよ」

先生は米倉の皮肉に気付かなかったようで、とにかく頑張れと言って立ち去った。気付いてはいたが気付かないふりをしたのかもしれない。

「それにしても」と僕は言った。「君は勉強なんかしてなさそうだね？」

「何故そう思う？」

「何となく似合わないよ」

米倉はほんの一瞬、感情を顔に出した。怒りか、嫌悪か、もしかすると哀しみか……。本当に一瞬のことだったので僕はそれを読み損ねた。米倉は苛立つように言った。

「はつきり言って勉強はしてるよ。誰よりもしてるんじゃないかな。ただ受験のために勉強することはない」

「やっぱり違うのかな、受験勉強は？」

「違うさ。君だって知ってるだろ？受験勉強は面白くないんだ。暗記ばかりだからな。暗記に必要性がない訳じゃないけど、それはあくまで勉強の補助的なものだ。受験勉強の問題は暗記で完結してしまうところだ」

意見が合いそうなので僕は言ってみることにした。

「本当に学校ですることは役に立ちそうもないことばかりだな。数学なんか人生の中では殆ど役に立たないだろうし」

「馬鹿なこと言うなよ」米倉は僕を嘲笑うように言った。

「君は解ってないんだ。数学ほど役立つものはないぜ」

「どう役に立つんだよ？」

「どう役に立つのか解らないくらい自然に役に立ってるんだ。筋トレと同じだよ。腕立て伏せとか腹筋とかの動き自体に意味は感じられないけど、ちゃんと身体は鍛えられている。いわば数学では脳が鍛えられるんだよ」

限りなく漠然とだが僕もそれは解る気がした。

「それをもっと早く聞きたかったな」

僕は何となくそう言った。

「本当はこういうことは教師が何よりも先に教えないといけないんだ。勉強の意味を言わずに勉強を教えるんだからおかしいもんだよ」

確かにそうだ。

「ところで」と米倉は言った。「どうせ『数学は役に立たない』なんて誰かの受け売りなんだろう？」

僕は小さく肯いた。

「勉強の出来ない奴ってのはすぐに言うんだ。学校の勉強は社会では何の役にも立たないってね。違うんだ。そいつが役に立たせることが出来ないだけなんだ。とてつもなく無駄な生き方してるんだよな」

米倉の目は僕を通り越して遠くを見てるように見える。

僕は思った。こうして米倉と話す機会を持つことが出来て良かったんじゃないか、と。これまでは同じクラスに居ながら殆ど関わりを持たなかったが、僕はベランダというもので米倉と繋がって……

「そうだ、ベランダだ」と僕は思い出して言った。「ベランダの話をしに来たんだ」

「よく思い出したな。でもとりあえず職員室を掻くつてのはもうよそう。君だってまた先生に何か言われるのは嫌だろ？」

確かに嫌だ。

「それにもう時間だ」

米倉がそう言うのと授業開始のチャイムが鳴った。もしかすると彼は時間を計算して喋っているのだろうか？

妙に落ち着かない気分のまま授業は始まり、不本意に落ち着いてしまつてから授業は終わった。最初はベランダを取り戻すことを考えていたが、それに関してはまず米倉の出方しだいなので考えることを止めてしまったのだ。

再び僕は米倉に掛け合つた。米倉はとにかくただでベランダを手放す気はないらしい。それで新しい条件を考えていた。今度は長谷川も話に参加していた。長谷川も暇なのだ。

「またバンジージャンプはどうか。バンジージャンプをしたらベランダを返すとか」

長谷川も状況を理解して来たようで、そう提案した。米倉はそれについて考えた。

「それも悪くない」と米倉は言った。「ただそれは面倒臭い。実際にそれをやる所まで行つて見届けないといけなからな。それに君はバンジージャンプをしたことがあるんだろ？」

僕は肯いた。

「どうだった？」

と米倉は感想を求めた。どうも米倉は話をベランダのことから遠ざけようとしている気がする。でも僕は米倉の質問に応じることにした。バンジージャンプをしたことは僕の数少ない自慢だった。

「怖かつたよ。膝が震えた。誰も見てなかつたら逃げ出してたよ」

長谷川は話題が自分の話しやすいものになったことを喜び、言った。

「隣で女の係員がカウントダウンするんだよな。『3、2、1、GO!』って」

「それが何かやたらと明るい声で楽しそうなんだ。こっちは凄く怖いのに。『あんに僕の気持ち分かるものか』って思つたよ」

僕はそう言葉を継いだ。長谷川はその時の状況を思い出して共感の笑みを零した。米倉が言った。

「さつき職員室でも思つたけど、君はどうやら勇気を出すコツを知つてるみたいだな」

「勇気を出すコツ？」

「想像力がある限り人間は恐怖からは逃れられない。それを逆に利用するんだ。例えばそのバンジージャンプでなら飛ばなかった場合、見てるみんなに臆病者と笑われるのが怖くて、飛び降りることが出来るだろ？つまりそういうことさ。勇気と呼ぶほどのものでもない。大体が人間ってのは良い状況を想ってそれを目指すよりも、悪い状況を想ってそれから逃げる方が動きやすいんだ。いざ飛び降りる時なんかもその飛び降りる想像から逃げる為に飛び訊だしなみんな『逃げ足だけは速い奴』なんだよ」

僕はさっきの職員室の時のことを思い出した。確かに僕はそんな風に動いた。だが、それはそれだ。

「それはそれで良いけどさ。それでどうしたらベランダを返してくれるんだい？」

「また、そのことか」

「『また』って解決してないんだから仕方ないじゃないか？」

「ところでさっきも言ったけどベランダの名前聞きたくないか？」

「さっきも言ったけど聞きたくない」

「初恋の人の名前を付けたんだ」

「いいから質問に答えてくれよ」

僕は少し焦っていた。これは最後の休み時間なのだ。米倉は少し間を置いてから言った。

「君は川本のことが好きなんだろ？」

「突然、何を言い出すんだよ？」

本当に何を言い出すんだろう？確かに僕は川本君子のことが好きだったが、それを知ってるのは長谷川ぐらいのものだ。

「やっぱり」

米倉はそう呟いた。僕は混乱しながら訊いた。

「何で解るんだ？」

「さっき川本が通りかかった時の顔だよ」

「僕はどんな顔をしてたかな？」

「いや、君は別に変わりなかったよ。君に落ち度はない。俺が言ってるのは長谷川の顔だよ。長谷川は君の表情を盗み見てたんだ。それでなんとなくそんな気がした」

「それでどうしたらベランダを返してくれるんだ？」

僕はそう言ったがその声は随分とバランスの悪いものだった。米倉は僕の動揺を見透かしたように不敵に笑って言った。



「君が川本に告白したら返すよ」

「それはいくらなんでも出来ない」

「どうして？」

「ベランダを取り返すために告白するって彼女に対して失礼じゃないか？」

「そんなこと気にすることないんだよ。彼女にとっても良い屈辱凌ぎになるだろうからな」

「でも……」

「どっちにしても明日だな。もう時間がない」

放課後、米倉は用事があると言ってすぐに帰ってしまつた。ベランダは依然として米倉の手中にある。僕ははがゆさと苛立ちで頭をいっぱいにして下校した。家に着く頃には明日こそは必ずベランダを取り戻すんだという決意が生まれて来た。家でふとベランダを見ると驚いたことに（驚く程のこともないのだが）洗濯物が干してあった。母もやはり息子の戯言にまともにつき合う気はなかったのだろう。しかしそれは許されることではない筈だ。僕は洗濯物を部屋に入れようかと思つた。が、面倒臭いので止めてしまつた。どう考えても正当ではないのだが、そこまで律義になる気もなかった。どうせ米倉にはばれる訳はない。米倉も別にベランダを何かに使おうということではなさそうだ。とにかく僕がするべきことは明日ベランダを取り戻すことだ。そのために川本に告白をする……。何かおかしい。それでいいのだろうか？

僕はそれから食事をし、風呂に入り、勉強をし、やがて布団に潜つたが、事ある毎に疑問は吹き出た。一体僕は川本に何と言えがいいのだろうか？僕は川本のが好きだったが、それを伝えようとは思ひもしなかった。僕と川本の間には距離があつた。僕と言う人間は川本には相手にされない気がしてた。川本は誰からも好かれるクラスの人気者……。というほどでもなかったがそこに好かれていたし、割と活発でまあまあ目立つ方だった（とても微妙な存在なのだ）。何度か話し掛けられることはあつたが、僕から話し掛けることはなかった。話し掛けることは出来なかった。自分でも不思議なくらい彼女の前だと緊張した。上ずる声とおどおどとした態度を彼女に見られるのが怖い。だから満足に話すことが出来なかった。

僕は布団から出て立ち上がり考えた。やはり条件を変えてもらおう。そう思いながら殆ど無意識にベランダに出た。

空を見上げると雲が一面に佇んでいる。月がぼんやりと光っている。静かだが何かが響いている。それが何なのか、はつきり解らないが、その分直接心に響いている気がする。それはどことなく米倉の言葉に似てる。それにしても米倉がこのベランダを必要とする理由は何なのだろう？

「訳が解らないな。どう思う？」

僕はそうベランダに話し掛けた。それはもちろん初めての試みだ。もしかすると僕はベランダに話し掛けた世界で最初の人間かも知れない。

だが当然返事は無かった。ベランダは普段全然話さない人に急に話し掛けられてうろたえている…ように見える。僕は勝手にベランダの返事を想像した。が、なかなかその言葉が出て来ない。しばらくしてから僕の中でベランダは言った。

「ベランダ……」

そして僕らの会話は終わってしまった。ベランダに「ベランダ」と言われて僕は一体どうしたらいい？どうしようもない。

ひどく馬鹿馬鹿しくなって僕は部屋に戻り戸を閉めた。そして再び布団に潜った。急に米倉がベランダに付けた名前が気になった。一体どんな名前を付けたんだろうか？聞きたくないと二度も言ってしまったからには自分からは訊けないが、次に向こうから言い出したら聞くことにしよう。全ては明日だ。

翌朝、目を覚まし学校へ行く準備をした。心の内では馬鹿馬鹿しさが膨らんでいた。早い所ベランダの件を片付けよう。いつまでもベランダのことばかり考えている訳にもいかない。僕はベランダを見た。ベランダには物干し竿が掛けてあり、その下では少し小さめの静かな一羽の鶏がいた。鶏……。寝起きでまだ頭の回転が鈍い僕は、状況を呑み込むのに時間が掛かった。でも状況を呑み込むとすぐに米倉が関わっていることが解った。しっかりと米倉の梯子が立て掛けられている。やれやれ、だ。米倉が鶏を抱えて梯子を登ってる姿が目に見えた。しかし彼はどんな顔でそんなことをしたんだろうか？

鶏は本当に静かに佇んでいる。僕はこんな静かな鶏を見たことがなかった。とりあえず僕は鶏を放っておくことにした。親は何と思うか解らないが、今日ベランダを取り戻せば全て解決するんだ。

米倉が学校に来たのは昼休みだった。焦りを抱えたまま僕は早速、米倉に訊いた。

「あれは君の鶏だね？」

「そうだよ。晩の間に置いといたんだ」

「鶏をあそこに置く必要があるのかい？」

「あれはひよここと鶏の中間なんだ。だからまだ鳴かないけどそのうちにうるさくなる。つまり邪魔なんだよ」

「なるほど。僕の家のことはどうでもいいわけか？」

苦笑いで僕が言つと、米倉は薄く笑つて言った。

「俺もそんなつもりじゃなかったんだけどさ、昨日ペランダに洗濯物が干してあるのを見てから気が変わったんだ」

「見に来たのか？」

「君は卑怯だ」

彼は質問に答えずに言い放った。そう言われると言い返せない。が、そんなことを気にしてる場合でもない。

「ところで例の条件を他のものに変えてくれないか？」

「断る」

「他のことなら何でもするからさ」

「いいことを聞いた。だからこそ条件は変えない。告白ぐらいすればいいじゃないか？鶏がうるさくなる前にな」

僕は昔から疑問に思つてることがあった。ひよこは鶏になる過程のどこで「コケコッコー」と鳴き出すんだろう？

ある日突然に大きな声で「コケコッコー」と鳴き出すとは思えないが、かと言つて「ピヨピヨ」から「コケコッコー」

に移り変わる途中の声を聞いたことがない。このままならそれを聞くことが出来るかもしれない。が、そんな悠長にしてられない。

「とにかく駄目なんだ。彼女の前だと緊張して何も言えなくなる」

僕は随分と情けない言葉を吐いてしまった。米倉は一瞬幻のような笑みを見せてから言った。

「彼女の前でどうしても緊張するんなら、精一杯緊張してしまえばいい。緊張つてのは伝染するからそれによって彼女も緊張する。その彼女の緊張を解きほぐしたいって君が

思つて発する言葉は君の心そのものだ。そしてそれは必ず彼女に届く」

僕は軽く吹き出してから言った。

「君は頭が良いな」

ああ、と彼は肯いた。何の照れもなく「何を今更」と言いたげだった。

「明日は何曜日だったけ？」

米倉が尋ねた。水曜日だと僕は答えたが、妙に間の抜けた声になってしまった。恐らくそれは米倉らしくない質問に意表を突かれたからだろう。米倉はそんなこと人に訊かなくても自分でちゃんといつだって把握してる奴だ。もしかしたら、と僕は思った。今米倉は僕を試したのだろうか？だとしたら一体何を試したというのだ？まあ、どうでもいい。米倉といちいちまともにやり合ったら頭がぐにやぐにやになってしまう。そのぐにやぐにやになった頭を米倉はゆっくり煮込んでソースでもかけてから、人に食わせてしまうんだ。米倉にはそんな雰囲気がある。それは風格とも呼べるかもしれない。

「君はいい奴だな」

と米倉は不意に笑って言った。僕はもう彼がどんな思考を辿っているのか見当も付かなかった。僕は半ばやけで言った。

「どうだっかっていいことだよ」

米倉は肯いて言った。

「ああ、どうだっかっていいことさ」

米倉と話しているうちに、川本に告白しようという気持ちが出て僕の中で大きくなった。米倉の相手が出来て川本の相手が出来ないこともないだろう。それにクラスのみんなに一目置かれている米倉と話していると、自分も米倉と同等に見られているようで周囲の目に自信が持てた。そんなふうに思うのは……恥ずかしいことなのだろうか。

「でも……僕は言った。「何て言えばいいんだろう？」」

「そのまま『好きだ』って言えばいいじゃないか？」

「でも『好きだ』って言うって『それがどうした？』って言われたらどうすればいいんだ？」

「『だから付き合ってくれ』って言えば良いだろ？思うまま素直に言えばいいんだ」

「念の為に訊いとくけど、それでちゃんとベランダを返してくれるんだろうね？」

米倉は肯いた。やはりベランダを取り戻す気じゃないと告白なんて出来そうにない。それ以外に告白をしなかった場合のマイナスは全くないのだから。昨日聞いた米倉の理論からするとマイナスから逃げるのが一番動きやすい訳だし。

僕は徐々にやる気になっていったが結局その日は告白出来なかった。機会がなかったし、その機会を作ることも出来なかった。帰宅してから僕はまず洗濯物を取り込んだ。天気が良かったのでちゃんと乾いていた。米倉にはばれないだろう。母が帰って来てからは鶏の言い訳をした。友達の手合で鶏を預からなければいけないということにした。母は渋々とそれを許してくれた。どっちにしても早い所解決しなければならぬ。全てを。

僕はその日の夜、戸を開けてベランダに出ようとして、やめた。それは卑怯なことだ。米倉に見つかれば、次は鶏じゃ済まないだろう。戸口に座って僕はベランダを見つめた。鶏は餌を食べている。誰がその餌を与えたのか解らないが、それはあまり気にならなかった。米倉か、母かそのどちらかしかないからだ。

それにしても、と僕は思った。人に譲ったものが有効に使われているのを見るのは悪い気はしない。けれど不思議な感じがする。ずっと身近にあった物が、ましてこの場合ベランダと言う、物として意識していなかった物が他の人間の物になってしまふというのは本当に妙だ。

僕はベランダでの思い出を引き寄せた（大した思い出もないが）。昔、僕はベランダで泣いたことがある。泣いた理由は忘れたが、僕はベランダで泣いていた。その場所を選んだのは人に涙を見せたくなかったからだろう。小学生の頃の話だ。最近泣くことはない。涙は枯れた訳じゃないけど、現在の僕は冷めている。いろんなものに飽きたからだろう。

でも、僕はもう一度、ベランダに出たいと思う。僕はベランダを失って初めてその存在の大きさに気付いた。これ以上ベランダのない生活が続けるなんて考えられない。僕にはベランダが必要なんだ。物質的にも精神的にも。もう一度ベランダで夜空を見上げたい（どうして僕はこんなに感傷的になつてるのだろう？）。

「君はどんな感じだ？米倉の物になって」

僕はベランダに尋ねた。ベランダはゆっくりと言った。

「解らない。別に誰の物でも、自分のすることは同じだから」

昨日よりずっとしつかりした口調だ。

「君は名前なんか欲しいと思うかい？」

「やっぱりどうせなら良い名前がいいけど、とりあえずベランダでいいよ。うん、シンプルで良い」

「そうだよな。ベランダはベランダだよな」

翌朝、隣家の人は僕とすれ違う時、探るような目付きをした。きっと僕とベランダの会話を聞いてしまったのだろう。今日こそはベランダを取り戻すんだ。……やれやれ、何度目の決意だろうか？

学校で僕はかなり本気で川本に話し掛ける機会を探った。でも川本は常に二、三人の友達と一緒にいるのでまるで機会はなかった。そして相変わらず僕にはその機会を作ることが出来なかった。それに僕と川本の会話というものが上手く想像できなかった。ベランダとの会話は想像できるというのに……。

米倉はそんな僕に苛立っているようだった。僕自身、なかなか訪れない機会に苛立ち、機会を作れない自分に苛立っていた。とにかく機会を作らなければならぬ。

「また、『どこか痒い所ないか？』っていきなり訊いたら良いじゃないか？」

米倉に相談すると、彼はそう言った。そんなこと訊いたら僕はこのクラスに居られなくなってしまっただろう。碌に話したこともない、しかもあまり冴えない奴にいきなりそんなこと訊かれたら……滅茶苦茶だ。大体そこからどうやって「好きだ」まで持っていけばいいんだ？

長谷川に相談すると、何だったら呼び出してきてもいい、と言った。僕はそれを断った。思えば長谷川が余計な仕事を任せなければこんなことにはならなかったんだ。どうも長谷川にものを頼む気はしない。恐らく長谷川に頼むとあちらこちらに知られてしまうのだろう。後数ヶ月で卒業とは言え、それはきつい。耐えられない（僕は自分がふられることを前提に考えている）。

三日が過ぎた。僕は依然、告白出来ずベランダを取り戻せない。勉強はまるで捗らない。ベランダとの会話は増えた。ますます隣人は僕を怪しそうに見る。米倉はいろんなことを語った。政治のこと、社会のこと、歌のこと、人間の悪について、そして駄洒落についても語ってくれた。その時、僕は駄洒落についての見解を求められてこう言った。「駄洒落は上手ければ上手いほど面白くないものだ」

それを彼は少し違うと言った。

「上手いは上手い、面白いは面白いで、全くの別物なんだ」「と言つと?」

「幾ら歌が上手くても、プロ野球の選手にはなれないってことさ。とにかく全くの別物なんだ。それが解つてない奴が結構いる。それが解つてないからいつまでも言葉遊びしか出来ないんだ。大事なのはいつでも想像だ。俺は最近想像が全てなんじゃないかと思うんだ」

なんだかよくわからないが、その時僕は米倉には敵わないと思えた。いつも米倉は僕より一つ深い。

鶏は三羽になった(米倉が置いていったのだ)。でもどれもまだ鳴かない。病気じゃないだろうか、と心配するくらい皆大人しい。実際病気なのかも知れない。僕はいつも家に帰るとすぐに洗濯物を取り込んだ。米倉の付けたベランダの名前はまだ聞けない。一度、ベランダで米倉がギターを弾いて歌っていたことがあった。僕が「何をしてるんだ?」と訊くと「見ての通りだ」と彼は言った。僕はそれ以上は何も訊かなかったが、米倉はこんなことを言っていた。

「この場所には余計な曲は要らないな。皆、すぐに曲を付けたがるけど、付けない方が良い場合もある。大抵の人間は余白があると不安なんだ。全てを塗りつぶそうとする。もっと余裕を持って空白を作っていけばいいんだ。空白は別に無じやないんだからさ」

その時、米倉が歌っていた歌の一節にこんなのがあった。ずっと軽やかな歌が続いていたが、この部分だけは重さが感じられた。

ずれたアンテナに気付かずに 映らないテレビに腹を立てる

明確な答えに怯えてるくせに 曖昧な表現を嫌って見せてる

可能性に勝手に蓋をして 「駄目だ」なんて嘆いてる

僕が覚えてるのはこれだけだ。ここだけは米倉の感情がはっきりと見て取れた。米倉は苛立っている。

土曜日。ベランダを譲り渡してから一週間が過ぎた訳だ。明日には父も出張から帰ってくる。この日、学校の廊下で

僕は一人で歩いている川本とすれ違ったが、やはり何も言えなかった。急にそんな機会がきても咄嗟には何も出来ない。心の準備と言うか、頭の準備と言うか、想像の準備と言うか、とにかく準備が出来ない。

僕は米倉に訊いてみた。

「どうすれば告白の出来る状況を作れるかな？」

「その気になれば何とでもなるだろ？なんなら今ここで川本に聞こえるように『川本、好きだ』って叫べばいい。その一言で全て解決なんだぜ」

「そうすればベランダのことについては解決だろうけど、僕は二度と素面で学校に来れなくなる」

「一つ訊いていいか？」

「何だい？」

「君は本当に川本君子のことが好きなのか？」

僕は肯いた。

「一体彼女のどこがいいんだ？」

「どこだろう？」

考えてみるとどこが良いのかよく解らない。このクラスになって初めて出会って幾度か言葉を交わして、それなりに好印象を持ったのだが、僕は一体彼女のどこに好印象を持ったんだろ？。

「まあ、そんなことはどうでもいいな」米倉は言った。「何なら君が告白をしやすい舞台を作ってやるうか？」

「そう言えば、長谷川にもそんなことを言って貰ったな。」

断ったけど

「どうして断ったんだ？」

「いまいち信用できないんだよ」

「それはわかる気がする」米倉が続けた。「長谷川は自分を見つける旅に出て、その日の晩飯までに帰ってくるタイプだもんな。俺も彼をあまり信用できない」

確かに…長谷川はそんな感じだ。

「僕はどんなタイプだと思う？」

「君は自分を見つける旅に出たら何年も放浪して無精髭を生やして、時々海辺で一人煙草を吹かすタイプだな」

「煙草は吸わないと思うけどね。それで君自身は？」

「俺は最初から自分を見つける旅なんかしないよ」なるほど。

そこに担任の先生が通りかかった。

「おまえ最近、授業中ぼーとしてるよな？何か悩みでもあるのか？」



僕に向かって先生はそう言った。

「あると言えありませんけど……」

「何かの役に立てるかも知れないし、俺に悩みを話して見ないか？」

「いえ、いいです。大した悩みでもないんで」と、というか先生にベランダの話なんかする気がしない。

結局、先生は「頑張れよ」とだけ言って立ち去った。頑張れと言うのが先生の義務なのかもしれない。職員会議で可決されたのだ。……こんなこと考えてる場合でもない。米倉が言った。

「あいつ殴ったらベランダ返してやるよ」

「殴れるわけないだろ？」

「あいつの授業をフルフェイスのヘルメット被って受けたらベランダ返してやるよ。もちろん上半身は裸でね」

「嫌に決まってるだろ」

「あいつの家で一人で静かに双六したら返してやるうか？」

「解ったよ。川本に告白するよ」

「そうだよ。さっさと覚悟を決めればいいんだ。放課後にも呼び出してやるうか？」

「頼むよ」

何だかよく解らないが僕の気分は盛り上がっていた。思考能力が低下して周りがよく見えない。細かく言えば周りの人間が僕をどう見るかを上手く想像できない。だから出来る気がする。大きめの声を出しているとこんな風になることがある。さっきの授業が体育だったせいもあるかもしれない。

最後の授業が終わってすぐに米倉は川本に何かを話していた。短い話を終えてから米倉は僕の方をちらっと見た。きつと……もう逃げられない。怖さもあるが、同時に期待もある。どう転んでもその経験は何かの役に立つような気がする。

教室から生徒が皆出ていつてから、米倉は僕に告げた。

「一六時半に女子更衣室の前だ」

「何が？」

「一時半に女子更衣室の前に川本を呼び出した」

「どうしてそんな所なんだよ？」

「本当は女子更衣室の中が良かったんだけど、さすがに無理だろうと思ってさ」

「だからどうして女子更衣室なんだよ？人も結構出入りしてるし、あんな所で待ってられないよ」

「不満なのか？」

「不満だよ。他に幾らでも場所はあるだろ？」

「屋上とか理科室とかで告白なんてありふれてるだろ？」

「ありふれてていいじゃないか？」

「駄目だよ」

「どうしてだよ？」

「多分見てて白けちまうよ。絵に描いたような状況じゃないか。とにかくもう手遅れだよ。川本は一六時半にそこに来るんだから」

とりあえず僕と米倉は一六時半の少し前に女子更衣室の隣の男子更衣室に入った。時々、僕はドアを開けて外を見た。まだ川本は来ていない。

「ところで」僕は訊いた。「呼び出す時、僕の名前を出したのかい？」

「いいや、出してない」

「そうか……」

僕の中で選択肢が一つ生まれた。逃げ出す……それもありだ。何度もドアを開けて女子更衣室の方を窺う。僕は人の目に怪しく映ってるだろう。僕がこの場所を選んだのだと思われるのも嫌だ。……来た。川本は落ち着きのない表情でゆつくりと一人で歩いている。僕は彼女の横を早足で何も言わずに通ら過ぎた。その時、彼女は窺うような目で僕を見たが、僕はすぐに目を逸らしてしまった。

「ねえ、ちよつと」

と背後で彼女の声が出た。振り向くと彼女と目が合った。彼女は僕を呼んだのだ。彼女は僕に歩み寄り微笑んだ。人の好感を得るこの微笑みは生まれ持ったものだろうか？それとも生まれてから生きてくために身に付けたものだろうか？考えてみれば僕が好きなのはこの微笑みだ。それだけかもしれない。それだけで十分だ。

「米倉君、見なかった？」

「米倉？」

僕の声は上ずっている。頭の回転はひどく鈍い。心の鼓動を感じる。僕はそれらを隠そうと心掛けた。こういう動揺というのは相手に知れるものなのだろうか？

「見なかったけど」

いろいろと答えを探して僕はそう言った。そう、と彼女は呟いた。そして僕は早足で立ち去った。居た堪れなかった。

自転車に乗って僕は校門を出ようとした。その時米倉が僕を呼び止めた。

「何してんだよ？」

「悪いけど帰るよ。やっぱり場所がおかしい。あんな所で告白なんて出来ない。人も多かつたし」

「あんな所ですれ違うのもおかしいんだから、どうせ同じじゃないか？」

「とにかく今日は帰る。後は任す」

僕は自転車を漕いで走った。向かい風が強かった。自転車で出かける時はどこに行っても向かい風だというのを聞いたことがあるが、それは追い風が感じにくいものだからだろう。強い追い風ならともかくとして、追い風というのは感じにくい。走っていると無風にも感じる。追い風を意識することは殆どない。向かい風ははつきりと感じる。ペダルを漕ぐ手応えを感じる。向かい風の中を逆走すれば追い風を感じるだろうけど、それは恐らく絶対にはいけないことなのだろう。

どっちにしても漕がないといけない。自分の行きたい所へ向かって。……僕はどこに行きたいのだろうか？僕はペダルを漕いでいるのか？

自分に対する悔しさを噛み締めながら僕は家に辿り着いた。僕は一人だった。また米倉は鶏に餌をやりに来るのだろうか？明日は日曜日だから川本に告白する機会はないだろう。川本はあれからどうしただろうか？もうどうでもいい。月曜日に適当に好きだって言って全て終わりだ。

僕はしばらく横になって好きな音楽を聴いていた。少しずつ気分は落ち着いていたが、それが良いことも思えなかった。でも楽になりたい時に楽になっていく自分を咎めることなど出来はしない。

空が闇に覆われてから僕はベランダの前に腰を下ろした。ベランダに出たかったが出なかった。生暖かい風がそよいでいる。どんよりと雲が空に溢れる。雲は地上の明かりで赤く濁っている。鶏が佇んでいる。鶏の糞は大分増えた。物干し竿は我が物顔でのさばっているが竿にはそんな資格はない。隣家からテレビの音が聞こえてくる。聞き覚えのある声だ。でも特定は出来ない。特定する意味もない。そ

うしたって少し安心出来るだけだ。今は何時だろう？もうそろそろ二十二時だろうか？僕は何をすべきだろう？勉強でもしようか？でもそういう気分じゃない。何か背中を押してくれるものがあればいいのだがそれも無い。テレビを見るか？いや、テレビを見てもがっかりするだけだろう。近頃はテレビを見るたびにがっかりする。どうしてだろう？本でも読もうか？この間、米倉が読んでた本は何だったかな？確かドストエフスキーだ。米倉はその本を推していたけど、僕には読める気はしない。僕ももう少し成長したら読もう。出来るだけ深く読めるように。僕のようなちっぽけな人間には、ちっぽけな読み方しか出来ない。米倉と話しているうちに僕はそんなことを感じた。

「僕は何をすればいいのかな？」

僕はベランダにそう尋ねた。ベランダは僕に話し掛けられるのを待っていたようだ。

「したいことをすればいいさ」

もつともな意見だ。でもこんな時にまともな意見なんか聞きたくない。聖者だからと言って人を幸せにすることができる訳でもない。

「具体的にさ、僕は何をしたらいい？」

「自分で考えなよ」

ベランダは苛立っていた。僕は焦っていた。恐ろしく不毛な会話。それはつまり恐ろしく不毛な僕の思考……

「君は悔しいんだろ？」

初めてベランダから話し掛けてきた。僕はただ肯いた。

「後悔してるんだろ？」

「後悔……」

「君は後悔してるんだよ。君は後悔というものが嫌いなんだろうけど、それを認めないと後でもっと後悔することになる」

「そうだろうね」

ベランダの言葉は僕よりはむしろ米倉のものに聞こえた。ベランダで僕と米倉は繋がりに、米倉で僕とベランダは繋がっている。危うい三角関係か……だとすれば米倉とベランダは僕で繋がっているのか？そう言えばこの考え方は数学的と言えなくもない。これはどうでもよさそうなことだけど、いろんな理論を紐解けばきつと数学がいかに役に立っているか解るのだろう。

雨が降りそう。明日は雨だろう。……いや、もう既に降り出している。まだ大した降りじゃないが、これはなか

なかな止まない雨だ。明日が日曜で良かった。僕は恐らく明日は雨が止む頃まで眠っているだろう。

僕は割と雨を見るのが好きだ。雨は人に疎まれながらも臆するところがない。雨に限らず自然はいつでも堂々としている。とても大らかで誇りが高く、そして真実だ。

そこに米倉が現れた。僕は意表を突かれて呆気に取られた。米倉はゆっくりと梯子を上って来た。米倉が柵を乗り越えてから、僕は驚いて何が何だか解らなくなった。米倉の後からもう一人上って来たのだ。米倉が手を差し伸べた相手は川本君子だった。何故川本がここにいる？僕は呆然と説明を待った。川本が柵を乗り越えてから米倉は僕の側で囁いた。

「ここが一番いいと思ったんだ」

「何がいいんだよ？」

「君が告白する場所だよ」

「……………何だつて？」

「この場所とこの闇と、おまけに雨まで降って来て、最高の舞台だろ？」

川本は不思議そうに米倉と僕の顔を交互に見ている。僕は何が不思議なことなのか解らなくなって来た。夢の中の感覚に近い。

「ただ隣のテレビの音が邪魔だな」

米倉はそう言った？一瞬それはベランダの言葉のように聞こえた。

「とりあえず、君もベランダに入りなよ。俺が許すから」僕は言われるままつつかけを履きベランダに出た。懐かしい感覚だ。米倉は川本の耳の側で何か言っているから、鶏に餌をやりに行った。川本は僕の方へと歩み寄った。やはり微笑んでいる。

「話つて何？」

川本はそう僕に尋ねた。話つてなんだ？僕は一瞬そう思ったがその答えは一つしかない。

「別に大した話でもないんだけど……………それよりよくこんな所に来たね？」

「米倉君とにかく来てくれって言われて……………」

言つて彼女ははにかんだ。僕の声はしっかりしたものだ。緊張してる場合でもないし、緊張を生む想像の暇もない。彼女は濡れた髪を気にしているようだ。

「タオル貸そうか？ちよっと取ってくるよ」

僕は返事を聞かぬまますぐにタオルを取りに行った。奥の部屋では母がうたた寝をしている。ペランダとは対照的に部屋の中はとても日常的な風景だ。僕は箆笥からタオルを二枚取って再びペランダへと戻った。タオルを川本と米倉に一枚ずつ渡した。川本はそれを微笑んで受け取った。「ありがとう」

それを聞いて僕は嬉しくなった。自分が思っている以上に僕は単純な人間なのかもしれない。それにしても、ありがとうの一言がこれほど嬉しいことはない。僕は本気で川本と付き合いたいと思った。川本と並んで歩きたい。川本を……………どうにかしたい。

米倉はじつと鶏を見ている。雨が少し強くなった。ペランダが呟いた。

「後悔したくないんだろ？」

その言葉で、僕の中の流れが一つに固まった。

「それで話って何なの？」

川本がさっきの質問を繰り返した。

「あの……………僕と付き合ってくれないか？」

川本は複雑な表情を見せた。驚きと混乱と戸惑いと怯えと……………まるで読み切れない。ペランダが言った。

「まだまだぞ。それは告白じゃない」

解ってる、と僕は胸の内呟いた。職員室での失敗は繰り返さない。

「川本のこと好きなんだ」

何てありふれた科白だろう？米倉はうんざりしてるんじゃないだろうか？そう思ったが米倉の顔を見る余裕はない。僕は昂ぶっていた。鶏がどんなふうに鳴き始めるのかが解った気がした。川本は不思議そうな顔をしている。そして米倉の顔を何度も見た。それは睨んでいるようにも見える。その後には彼女は僕を見た。ふと、目が綺麗だ、と思えた。彼女は必死に言葉を探している。何だか苦しそうだ。僕が先に口を開いた。

「好きな人とかいるの？」

彼女はゆっくりと肯いてから言った。

「付き合ってる人がいるの」

それほど期待してた訳じゃないけど、その言葉は辛く胸で轟いた。今度は僕が言葉を探した。

「誰と付き合ってるの？」

さほどそれを聞きたかった訳ではないけど、取りあえず僕は訊いてみた。彼女は米倉を見た。米倉は雨を見ていた。

雨は静かに世界を濡らし続ける。何故か僕は取り残された気分になった。彼女が言葉を発した。

「米倉君と……」

僕は耳を疑った。そして自分の脳を疑った。自分の中で何かが崩れる音を聞いた。僕は米倉の顔を伺うことも出来なかった。

「いつから？」

これは訊かない訳にはいかなかった。

「今日、付き合ってくれて言われて……」

「あの時？」

彼女は一瞬迷ってから、ゆっくりと肯いた。迷うこともない。「あの時」と言ったら「あの時」しかない。僕は米倉に歩み寄った。

「一体どういつつもりだよ？」

「こうするしかなかったんだ」

「そんなことないだろ？」

「君が告白出来るとしたらこの場所しかないと思ったんだ」

「だからってどうして……」

「あかの他人に人の家のベランダに来てって言われても来る訳がないだろ？」

それはそうだが……交際を始めたばかりの人間に言われても、こんな所に普通は来ないだろう。そして僕が訊きたいのはそんな言葉じゃない。

「君は本当に川本と付き合うのか？」

「成り行き上、そうなったな」

僕の中で何かが乱反射している。それは少しずつ熱を生み、熱い空気が頭の内のガラスを白く曇らす。

「そんなに僕が川本に告白する場面が見たかったのか？」

「一回、言い出したらちゃんと実行しないとすっきりしないじゃないか？」

疑問は幾らでもあったが、何から訊けばいいのか解らなかった。僕は一つ大きなため息を吐いた。僕は米倉の思考の断片を一つも拾うことが出来ないのだろうか？

「君は自分が何をやってるのか解ってるのかい？」

「はつきりは解らないけど、大したことではないだろうな」  
しばらく僕は黙った。頭を整理するつもりだったが、その行為はまるで捗らなかった。米倉が言った。

「俺達を追い出さないのか？もうここは君のベランダなんだぜ」

「いいよ。雨がもう少し小降りになるまではここに居ればいい」

「君は本当にいい奴だな」

「この上、罪悪感まで抱えてられないってだけだよ」

僕らはしばらく無言で雨を見ていた。雨は強まったり弱まったりしたが止む気配がない。川本は待つてもキリがないということ帰った。僕は家に余っていた傘を一本渡し、部屋を通した。母は上手い具合に目覚めなかった。川本は玄関から去って行ったが、一体どんな気持ちなのだろう？僕をどう思い、米倉をどう思っているのだろうか？さっぱり解らない(ただ終始不思議そうだった)。

米倉はベランダに残った。米倉はまだ僕に話があるのだろう。僕も米倉に話がある。だが言葉はなかなか出ない。少し寒い。風邪をひくかもしれない。僕か、米倉か、川本か、鶏か……

「一つ言っておくけど」やがて米倉が口を開いた。「俺は君のことが嫌いなわけじゃない」

僕は肯いた。でもどうせならそれは聞きたくなかった。

僕は一番初めの疑問をぶつけることにした。

「一体どうしてベランダをくれたなんて言い出したんだ？まさか鶏を飼うためではないんだろ？」

米倉は小さく笑って言った。

「それをどうして今まで訊かなかった？」

「訊かなかったっけ？」

「多分な」

「だとしたら、それを訊くのは無粋だと思ったからだよ」

「君も大したものだな」

僕らは軽く笑った。ベランダは笑わなかった。僕はもう大分、冷静になっていた。普段程ではないが。

「質問に答えてくれないか？」

「ちよつと一週間前だな」

「ああ」

「あの時、君は退屈そうだった」

「退屈だったんだろうね」

「理由はそれだけだよ」

「……………僕が退屈そうだから……………ベランダをくれた？」

「そうだ」

「もう少し詳しく話してくれないか？」

「君は退屈するってことはどういうことだと思う？」



僕は考えた。

「……………することがなくて感情を動かすもののない状態かな？」

「それも間違っていないと思う。けど俺はその状態でも想像力さえあれば退屈しないと思う。と言うより、想像力があればそんな状態にはならない。想像力があればすることを見つけ出せるし、感情を動かすことができる。結局、退屈するってのは想像力が欠如してるってことだと思っただ。」

「前にも言ったと思うけど、俺は想像力が全てだと思っただ。」  
「つまり想像力があれば退屈なんかしないってことだね？」

「そうだ。ただしっかりとした想像の出来る人間っていうのは希なんだ。」

「しっかりとした想像？」

「想像というのは誰でも出来る。けど多くの人の想像は粗い。もちろん実際に人のそれを見たことはないけど昔の俺の想像というのは粗かった。だから何となく解るんだ。粗い想像しか出来ない人間ってのがさ。」

「それが僕なんだね？」

「一週間前はそう思った。でも今はそう思わないな。最初から俺が読み違えてたのか、俺の思惑通りこの一週間で君が変わったのかは解らないけどね。」

「……………君は僕に想像力をつけるためにベランダをくっつけて言ったのか？」

彼は肯いた。嘘臭かったがとりあえず信じてみた。僕は尋ねた。

「粗い想像とそうじゃない想像の違いは何なんだ？」

「臨場感だろうな。精密でリアルでその上に臨場感があるのが優れた想像だ。俺の想像は現実を圧倒して、それを現実と思えるような臨場感がある。その世界には俺が実際に存在してるんだ。いわば夢を見ているような感じなんだ。」  
夢を見てるようなもの……………何となく解る気もする。米倉が続けた。「俺は理解者が欲しかった。俺の世界を一緒に見れるような奴に会いたかった。悪いけど、俺は君を選んだ。」  
「期待に添えなくて悪かったね。僕は君についていけない。」

いろいろな事を思い返しながらそう言ってみた。そのなかかけらの一つが僕を弾いた。

「僕は一番最初に感じたことを信じるべきだったのかもしれないな」僕は言った。「君にとっては全て冗談だったんだろ？」

「そうだよ」と随分とあっさり彼は肯いた。

解らないことはまだたくさんある。話さないといけないこともたくさんある。が、もういい。疲れた。雨が精神を掻き乱しているようだ。しばらくの沈黙の後に米倉が言った。

「そろそろ帰るよ」

「傘を貸そうか？」

「それよりダンボールないか？鶏を持って帰らないと」

僕は家の中を探した。鶏が三羽ぎりぎり入るようなダンボールを見つけそれを米倉に渡した。

「代わりにこの梯子やるよ。冗談めきでこんなもの持って帰れない」

僕は困ったが断れなかった。まあいい。何かの役に立つかもしれない。鶏が窮屈そうに身を屈めているダンボールを小脇に抱えながら、米倉は器用に刪を乗り越えた。僕は彼を呼び止めて訊ねた。

「最後に一つだけ訊いていいかな？」

「何だい？」

「どうしてベランダなんだ？」

「どうしてもだよ。それじゃ、また学校で」

彼は帰った。意味が解らなかったが僕はもう何も言わなかった。これからまた米倉は苦労して帰るのだろうが、僕にとっては全て終わったのだ。いや、まだだ。玄関や部屋にある鳥かごやサッカーボールをベランダに戻さないといけない。そして全てが終わるんだ。

全てを終わらせるのは何故だか度胸が必要だった。鳥かごを、サッカーボールを、ローラースケートを、デッキチェアを、全てを元の場所に戻した。ベランダは徐々にベランダに成って行った。ただのベランダに……心を失くしたベランダは冷たく感じられた。全てが元どおりだ。雨は大分世界の色を塗り替えた。

瞬間、世界は霞んだ。滴が頬を伝った。そう言えばと僕は思った。米倉がベランダに付けた名前を聞いてない。訊けば良かった。ふと見るとベランダの刪に何か札が掛けられている。いつから掛けられていたのかわからないが、そこには「キミコ」と書かれている。名札だろうか？米倉がベランダに付けた名前？キミコ？川本君子？ベランダに初恋の人の名前を付けた？うんざりだ。これ以上は何も考え

たくない。頭を抱え足元を見るとさっきまで鶏が居座っていた場所に何故だか卵が転がっている。僕はその卵を雨に向かって思い切り投げつけた。

(了)

---

『ペランダ』 山城真道 著

sakka.org